千冬と束は似た者同士

彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
千冬と束は似た者同士

【Ｎコード】
Ｎ０５７６Ｚ

【作者名】
彩

【あらすじ】
千冬と束がひたすら仲良しな話。そして千冬の性格が全く別人な話。とりあえず、親友仲は恋仲にシフト？姉弟、姉妹仲は良好です。そして束はやっぱり天災のままでした。

まえがき

まえがきですが、小説の方向性をまんま書いてます。苦手な方は回れ右推奨です。

この小説は、主に千冬で構成されております。次点で束。
とりあえず作者が千冬と束の百合を書きたかっただけ。ひたすら仲良くじゃれあう二人を書いてみたかった。
ちなみに、千冬のほうの性格捏造が酷い。いろいろ違う方向に向いていますが、それでもいい方のみ、楽しんで行って下されば。

……あと、作者は戦闘シーンが苦手。ＩＳの機体についても、原作見ながらどうにかこうにかですので、機体の性能とかアドバイスもらえたらうれしいです。

批判中傷は、お控えくださると。お手柔らかに、気長にお付き合い下さると幸いです。

似た者同士たちの出会い

「ああ、嫌ね。面倒だわ」

よる、めをさましたら、おかあさんのこえがきこえた。

「今更、そんなこと言っても仕方ないだろ」

リビングでおかあさんと、おとうさんがはなしてた。

「でも私、言ったわ。結婚するときに」

なにをはなしているのかな？わたしはドキドキして、ろうかからおかあさんとおとうさんのはなしを、きいてみた。

「私、子どもは絶対にいらないって、言ったわ」

わたしは、いらないこどもなんだって。

とある幼稚園の、入園式。一クラス三十人あまりで、計三クラス。クラス名はあさがお、たんぽぽ、ひまわりと幼稚園らしい可愛らしいもの。

全体を通しての入園式が終わり、クラスごとの部屋に来て数十秒。イスに座ったままはしゃぐ子、緊張したように周りをキョロキョロと見ている子、立って歩き回ろうとして早くも注意されている子。

少しだけ見慣れてきた毎年毎年の光景と、子どもたちの騒ぎ声に、部屋に入ってきた今年で二年目の若い女の先生が、笑顔で口を開いた。

「はい、みんなー！こんにちわー」

「こんにちわー！！！」

元気に挨拶をすれば、殆どの子どもが元気よく、中には恥ずかしそうに小さな声で、返事をしてくれる。彼女はそれに笑みを深めて、大きな身振りで自分を示して子どもたちを見渡した。

「今日からみんなの先生をする、佐々木加奈です。加奈先生って、みんな呼んでねー」

「かなせんせー！」

「はーい！」

上々の反応に、加奈はうんうんと頷く。出だしは好調に見えた。にこやかに笑顔を浮かべたまま、加奈は子どもたちを見回す。笑顔の子、おどおどした子、隣の子に話しかける子、たくさんいた。

「（……あれ？）」

その中に、加奈は予想しない存在を見つけて、少しばかり驚いて目を瞠る。

見つけたのは、どういうわけかパソコンを持ち込んでいる女の子。周りを一切気にせずにカタカタとキーボードを打ち鳴らす姿は、子どもとは思えないほどに異様に映る。

加奈が特に気になったのはこの子ども。けれどその疑問も、次々に消化しなければ無い恒例行事の為にすぐに思考の外へと追いやられた。

「それじゃ、まずは自己紹介をしましょう。お友達に、自分の名前を元気よく教えてあげてくださいね」

一番は、相田君。そう彼女の言葉で順調に始められた自己紹介に、またも彼女が少しばかり目を見開いたのは、あ行が終わる直前の事。

「――――織斑千冬です」

席を立ち、名乗り、また座る。僅か三秒の出来事に、加奈は何も言えずにあんぐりと口を開けた。

どの子どもも、もじもじと照れたり、元気よく名乗ったりと子どもらしさが見えるのに、たった今名乗った女の子にはそれが無い。ただの事務作業のように、それを終わらせてしまった。

「……あ、そ、それじゃ次は、川内藍ちゃん」

「ひゃ、ひゃい！」

思わず呆けてしまった彼女は、慌てて次の女の子を促した。今は順調に自己紹介を終わらせることが第一とされ、一人だけを気に掛けるわけにはいかないのだ。

そのまま、彼女の思うところの子どもらしい自己紹介が続き、さ行に差し掛かったところで。順番は、彼女が気にしたパソコンを持ち込んだ女の子の番となった。

「それじゃ、お名前を言ってくれるかな？」

「……」

「あ、あれ……？」

促しても、女の子は彼女を見ようともしない。ただ無表情に、一

切の音を遮断しているかのようにパソコンを打ち鳴らしている。

「えっと、お名前、言ってくれるかな？」

再度、困惑しながら聞いて、初めて女の子がパソコンから一瞬、視線を加奈へと向けた。その視線はまたすぐにパソコンに戻されたが、ぼそりと小さな呟きが一つ。

「……篠ノ之束」

これで良い？とばかりに響いた名前に、加奈は思わず頷いてしまって、自己紹介は次へと進む。

「（ど、どういう事かしら……？）」

子どもたちの自己紹介を聞きながら、加奈は困惑に頭を悩ませた。自己紹介前半にして、既に問題児候補が二人。それも、やんちゃで困るというのとはまた別の意味で困りそうな、そんな問題児候補。

これから彼女は、そんな問題児たちがいるクラスを受け持たなければならない。

「（……がんばれ、私！）」

心中で激励して、こっそりと握った握りこぶしは、じっとりと汗ばんでいた。

入園式のみで終わったその日の翌日。

大きな部屋ではあちこちで遊ぶ子どもたち。鬼ごっこやままごと、

積み木遊びとジャンルは幅広い。
先生である加奈が声をかけるのもあって、人見知りで混ざりたくても混ざれないでいる子どもは、すぐに何かしらのグループに入れられる。そのおかげで、一人で遊んでいる子どもは残すところ二人だけだ。

「千冬ちゃん、皆と遊ばないの？」
「いいです」

千冬は、二人のうちの一人だった。誰とも遊ぼうとせず、ただ眺めているだけ。加奈が声をかけても、淡々と素っ気ない返事をするだけだ。

「（厳しいわね……）」

実は彼女、千冬に声をかける前にもう一人、パソコンを持ち込んだ女の子にも声をかけている。が、女の子には返事さえしてもらえず、その存在を認識すらされずに終わってしまったのだ。

「あっ……」

困惑する加奈を前に、千冬はてくてくとその場を離れる。放ってはおけないが、扱いに困ってしまって、触れるに触れられない。

「かなせんせー！！」
「あ、はいはーい」

他の子どもに呼ばれて、加奈はそちらへ向かう事にした。
一方、加奈から離れた千冬は、折り紙や絵を描く為に用意された机のある一角に座っていた。

椅子に座って、他の絵を描く子どもたちからは十分すぎるくらいに距離を取っている。そうしてただぼんやりと、遊び回る子どもたちを眺めていた。

「（うるさい……）」

沸き起こるのは子どもらしからぬ感情のみで、千冬は椅子の背もたれの寄りかかる。

静かな場所で、一人になりたい。それが少女の望みだった。

けれどその望みとは裏腹に、少女の周りは騒がしさに溢れていた。すぐそばを走りまわる子どもたちの足音とはしゃぐ声に、少女は椅子を飛び降りてまた歩き出す。

「（……静かな場所は、どこだ？）」

一人でいると、先生が声をかけてきた。子どもたちの近くにいると、そこはいっそう騒がしかった。

出来るなら一人でいたかった。静かな場所にいたかった。

それが無理でも、せめてこの騒がしい空間で一番静かな場所は、と千冬は壁沿いに部屋を歩いて探し回る。

そうして辿り着いたのは、もといた部屋の角の対角線にあたる部屋の角。そこは他の子どもたちも距離を置き、たった一人の子どもだけが占有する空間。部屋の騒がしさから僅かに離されたそこで、女の子がパソコンをカタカタと打ち鳴らす。

千冬は、この騒がしい部屋でようやく見つけた空間に、静かに静かに息を吐き出した。

「邪魔、する」

一応は、先住者である少女にそう声をかけて、千冬はすとんと座

って壁に寄りかかった。それに驚いたように顔をあげたのは、先住者の少女だ。
少女はカタリとパソコンを打つ手を止めて、座り込んだ千冬を眺める。じっと見つめてくる眼差しに、千冬はただ無言で見返して、やがて面倒くさそうな様子で目を閉じた。

「……ここ、束さんの場所なんだけど」
「そうか」
「邪魔なんだけど」
「少しだけ、いさせてくれ」
「なんで」
「ここは静かなんだ」

あっちは煩いと、千冬は思ったままに告げる。それから、少ししたらすぐに出て行くからとも言って、体育座りで立てた膝に額を押し付けた。
小さく縮こまったその姿は、邪魔だという少女の邪魔にならないようにしているかのようだった。

「……ねぇ」
「……なんだ」
「名前、なんていうの？」

少女は千冬の名前を覚えていなかった。けれどそれは千冬もまた同じで、千冬は少女の名前を知らなかった。過去形なのは、つい先ほど、少女が自分で名乗ったからだ。束さんと。

「織斑、千冬」
「千冬……」

縮こまった体から発せられた声はくぐもっていた。少女は千冬の名前を繰り返して呟くと、今までの無表情が嘘のような笑みをパッと浮かべる。

「ちーちゃん」
「……なんだ、それは」
「束さんはちーちゃんと呼ぶことに決めたよ。いいでしょ？いいよね！」
「……好きにしろ」

一転して騒がしい少女に、千冬は投げやりに肯定の言葉を返した。のそのそと近づいてくる音に顔をあげる。すぐ隣で少女が千冬を見ていた。

「ちーちゃん」
「……」
「私はね～、篠ノ之束だよ。束さんだよ」
「……そうか」
「そうなんだよ！」

意味も無く強く頷いて、束は千冬の隣でまたパソコンをカタカタと打ち鳴らし始めた。
二人のいる部屋の角は他の子どもから距離を置かれて、子どもたちの遊ぶ騒がしさからは少し遠い。
入園してから翌日に千冬が見つけたのは、パソコンのカタカタと鳴る音が響く、束という先住者のいる空間だった。

似た者同士たちの出会い（後書き）

転生者が千冬と束と同じ幼稚園で出会う二次創作では、束はともかく、千冬がとても子どもらしいです。
それを見て、思ったこと。千冬が束みたいな性格だったら、どうなんだろうと。
そんな千冬の、変わった話。ぶっちゃけこれが書きたかっただけとか、言えない。

問題児は問題児

翌日、空は晴れ渡る青空だった。
当然のように外で遊ぶことになって、千冬は照りつける太陽から逃げる様に日陰に入って座っていた。
遠目に砂場で遊ぶ子どもたちや、時折視界を走り去る鬼ごっこをする子どもたち。
千冬のいる日陰はそんな彼らから遠く、先生の目の届くギリギリの範囲だったため、子どもたちの騒ぎ声は遠かった。

「ちーちゃん、嬉しい？」
「……ああ」

静かで嬉しいか、と聞いた束に頷いて、千冬はぼんやりと木の葉を眺める。当然のように束がいるけれど、気にはならなかった。

「見て見て、ちーちゃん！」

軽く目を閉じた千冬に、束は身を寄せてパソコンを差し出す。横に細長いノートパソコンの画面に表示されている数式と何かの設計図に、千冬は首を傾げた。

「これは？」
「束さん特製の最新パソコンだよ！空中投影型ディスプレイ&キーボードでいつでもどこでも大画面で大容量だよ！すっごいんだよ！」
「へぇ」
「……信じてない？」
「いや」

軽い返事に不安そうに瞳を揺らした束に、千冬は首を振る。そうしてじっとパソコンの画面を眺めて、もう一度首を傾げて答えた。

「理解は出来ないが、凄いのはその説明で分かった」

「本当！？」

「ああ。束は頭が良いんだな」

「――――うんっ！！」

千冬のその肯定は、束にとって初めての肯定だった。

子どもの身でありながら、大人ですら完成させることのできない理論を完成させる束を認める大人は、束の周りにいなかった。両親ですら、束を腫物のように扱う。

同じ子どもでも、束の傍には誰も寄らない。無表情でただパソコンを打ち続ける少女は、幼い彼らにとって理解できない不気味な存在だった。

「えへへっ、ちーちゃん！」

「……？」

そんな束に近づいてきたのは、千冬だった。

昨日一日、束は千冬と一緒にいた。千冬は何にも興味が無いようだった。子どもたちが遊び回るのを、煩そうに見たりはしていたけれど。

それは、まるで束と同じように思えた。束は興味が無いものに一切の関心を抱かない。それは物だけではなく人間にも同様である。

ただ無関心に世界を見る束にとって、千冬は初めて興味を抱けた人間だった。いや、もしかすれば既に、それだけでは無くなっているのかもしれないけれど。

「千冬ちゃん、束ちゃん」
「……」
「……」

抱き着いてくる束を、千冬が首を傾げながら受け止めていると、先生が声をかけてきた。
途端に表情を消す束。千冬もまたチラリと視線を向けて、けれどすぐに視線は先生を越えて空へと向く。ぼんやりと眺めた空は、雲一つ無い青空。

「みんなと遊ばないの？」
「いいです」
「……そんなこと言わないで、遊びましょ？」
「……いいです」
「あ、ちーちゃん待ってー！」

何度も誘いをかける先生に、千冬は一言告げると立ち上がり、日陰から出て行く。それを追って束もまた日陰を飛び出し、千冬の隣を並んで歩いた。

「ちーちゃんちーちゃん」
「……なんだ？」
「束さんを置いて行かないでほしいんだよ。泣いちゃうよ？」
「……そうか」
「ああっ、待って待って！！」

束がふざけて泣き真似をしてみせると、千冬はまったく気にした風も無く歩いて行ってしまう。それを慌てて追いかける。
そうして辿り着いた次の日陰は、少しばかり騒ぎに近い場所だった。

「ちーちゃん、ご機嫌斜め？」
「いや」
千冬は、煩くは感じても不機嫌になってはいなかった。昨日の騒がしさに比べれば、まだずっとましである。
二人はそのまま日陰の中で、束が千冬に寄りかかるようにしながら、座っていた。パソコンを打ち鳴らすカタカタという音が、千冬の耳を刺激する。その音を聞きながら、少女は目を閉じていた。

「……」
自分の周りに溢れる子どもたちに、千冬は困り果てていた。
切欠は偶然。日陰でぼんやりとしていた千冬たちの元に、ボールが転がってきたことだった。
ボールで遊んでいたのは、二人から随分と離れた場所にいた子どもたちで、千冬は仕方なしにボールを持って子どもたちに渡しに日陰を出た。投げ返すには遠すぎたからだ。
束は行かなくてもいいと言ったが、目の前にボールが転がったままなのも千冬にとっては鬱陶しくて、それゆえの行動だったのだが。
問題は、その帰り道。先ほど撃沈した先生が、砂場を通りかかった千冬を一緒に遊ぼうと誘ったことだった。
子どもの一人が先生の真似をして、千冬を遊びに誘った。そうしてそれが広がり、砂場の子どもたちから揃って遊ぼうと誘われ、囲まれた。
「（……煩い）」

せっかく騒ぎの外にいたのに、気づけばその中心に連れてこられて、千冬は不機嫌だった。表情には一切の変化を見せないが、その実、早くこの場から立ち去りたい気持ちでいっぱいだ。

「お城作ろう！」
「作るー！！」

そんな千冬の心情など知ったことじゃない子どもたちは、えっさえっさと砂を盛り上げお城を作ろうと奮闘する。しかし、全員が全員、好きなように作ろうとするものだから、出来上がるのはぐしゃぐしゃの砂の山。

できなーいとたくさんの声が上がって、騒がしさが増す。それに耐えかねて、千冬は砂に手を伸ばした。

「みんなでいっしょに作ればいいよ。さいしょは、おしろのかべを作ろう」
「うん！」
「ぼくもつくる！！」

千冬の真似をして、子どもたちがお城づくりを再開する。ところどころで千冬が指示を出して、皆で同じものを作り上げた。

結果として、小さいながら先ほどの砂の山とは泥雲の差のお城が出来上がった。

「できたー！！」
「ちふゆちゃん、すごーい」
「……」

尊敬のまなざしで千冬を見る子どもたちに、本人はといえばもう良いだろうかと考えていた。

遊んだのだから、もう良いだろうか。もう離れても良いだろうか。楽しそうな子どもたちを前に、千冬は小さな笑みを浮かべて見せると、緩慢な動きで立ち上がり歩き出した。

「あっ」

「ちふゆちゃん、どこに行くの？」

さながらハーメルンの笛吹が如く、歩き出した千冬の後ろをぞろぞろと着いて歩く子どもたち。砂場をいったん離れて、他の子どもたちの様子を見ていた先生は、それを見てあんぐりと口を開けてしまった。

昨日一日、束以外の子どもと話す姿を見なかった少女が、子どもたちを引き連れている。それに驚いたのだ。

引き連れている本人は、全くの無表情で楽しそうには見えなかったけれど。

「千冬ちゃん」

「せんせい、なんですか？」

「皆、千冬ちゃんともっと遊びたいんだって。一緒に遊びましょ？」

「……」

千冬が振り返ると、そこには目をキラキラさせた子どもたちがたくさんいて、加奈の言葉が嘘ではないと肯定しているようだった。

「……つかれ、ました」

「え、もう……？」

言った千冬が、疲れるほど遊んでいたようには見えなくて、加奈は思わず聞き返してしまった。それに返ってきたのは無言の頷きで、うーんと頭を悩ませる。

子どもたちは、千冬の事情などまるで気にした風も無く、立ち止まったその周りを囲んで遊ぼうと誘いをかけてきた。

「（……煩い、な）」

騒がしいのは嫌いだった。千冬は加奈を見上げるが、彼女は困ったように笑うだけ。

助けは期待できない状況に、千冬は子どもたちを見て一つ提案をした。

「かくれんぼをしよう」

「かくれんぼ？」

「やろーやろー！」

否は無く、その提案に全員が乗ってくる。千冬は加奈を見て、小さく首を傾げて聞いた。

「せんせい、おにやってくれませんか？」

「あ、私？ええ、いいわよー」

「じゃあ、ひゃくかぞえて。みんな、かくれて」

「わー！！」

千冬が言うと、一斉に子どもたちは散り散りに走っていく。加奈はその無邪気な様子に笑みを浮かべて、それからふと、千冬がその場に立ったままなのに気づいて首を傾げた。

「千冬ちゃんも、早く隠れないと」

「私は、いいです」

「え？」

「私は、遊ばないです」

呆気にとられて固まってしまった加奈に、千冬はくるりと背を向けて歩き出す。向かったのは束が座る日陰で、加奈が見送る先で少女はそこに座り込んだ。

「……困った、わねぇ」

人気者になったけれど、少女にその気は無いらしい。

視界の中で、束が千冬に抱き着いていた。

「ちーちゃん、おかえり！！」

「……ただいま？」

首を傾げて言った。束はギュゥッと千冬を抱きしめて、体全体で喜びを表現するかのようにしながら笑っている。

「ちーちゃんがいなくて束さんは寂しかったんだよ～」

「……束もくればよかったんじゃないか？」

「え、嫌だよ。束さんにはちーちゃんだけがいれば、それでいいの！」

「そうか……」

自慢げに言う束に、千冬はただ小さく返しただけで、視線は晴れ渡る空へと向けられた。首に回った腕に軽く手を添えて、軽く目を閉じる。ここは、束の声は聞こえるけれど、他の音は遠くて静かだ。

「束の傍が、一番落ち着くな」

「えっ、本当？本当ちーちゃん！？」

「……静かで、いい」
「っうれしいな、束さんもちーちゃんの傍が一番いいよ！！」
ギュウウと抱きしめられる腕に力が籠められる。少しばかり苦しくなって、ポンポンと軽く腕を叩いて知らせると、慌てたように束が力を緩めた。
静かなこの空間で、千冬はのんびりと目を閉じて微睡んでいた。

問題児は問題児（後書き）

初投稿なので、二話連続で。あとはのんびり更新です。
ちなみにこの作品、束の千冬へのデレ度は常にＭＡＸです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0576z/

千冬と束は似た者同士

2011年12月2日01時57分発行